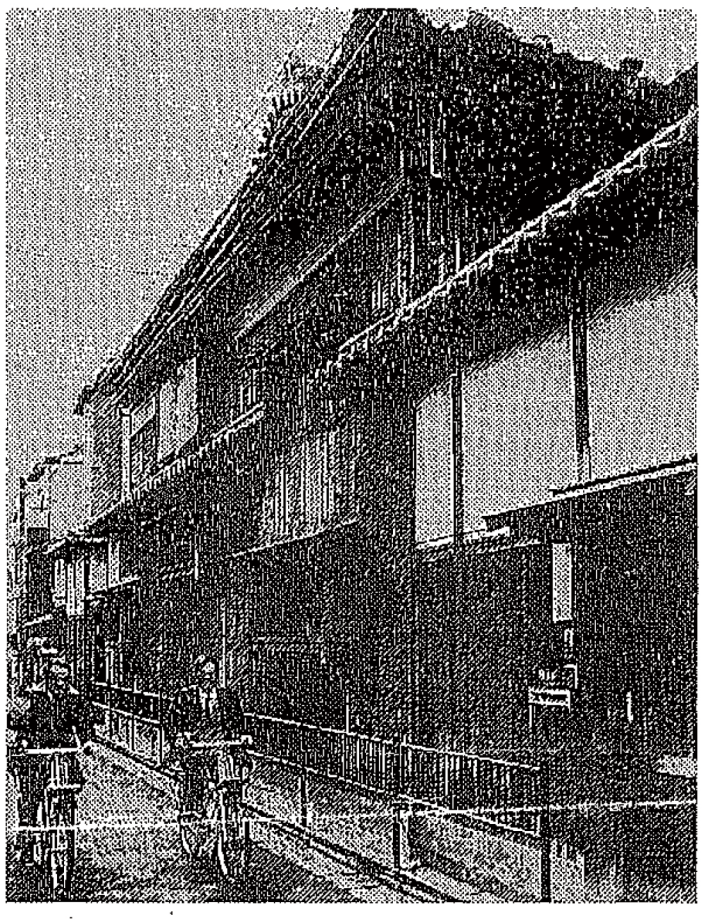
上方歌舞伎の光芒 香り今も伝える

旧実川延若邸（大阪市）



上町台地は古代から「夕日」の名所であった。この台地の一角に、高名な歌舞伎役者の住んだ家がある。大阪風日本建築の粋と、前進座の女形だった故河原崎国太郎がたたえた。

二代目実川延若。

道頓堀の浪花座に本拠をかまえ、中座に君臨する初代中村鴈治郎に対抗した、上方歌舞伎の大立者である。

空襲で大阪は焦土と化したが、延若邸と千日前の歌舞伎座は残り、晩年の延若が演じた『楼門五三桐（さんもんごさんのきり）』の石川五右衛門は、演劇界の伝説となった。四分の三世紀を生き抜いた老優の絢爛（けんらん）たるセリフは、大阪の地に堆積（たいせき）された都市文明の記憶をはきだして、ファンを熱狂させた。

沈みゆく入り日の残映がひときわ大きく日輪を輝かせるように、落日の上方歌舞伎が最後の光芒（こうぼう）を放った、錦絵さながらの舞台は、今も記録映画で見ることが出来る。

昭和初期に旧延若邸へ毎日のように出入りしたという田中鳩平氏（大阪府生活文化部・上方演芸専門委員）の話では、常時四、五十人はいたという門弟たちの木の札が、玄関の中の間にかかっていたという。家の構造は昔のままとのことだ。今はドクター一家の所有となって、大切に管理されている。

片岡仁左衛門家は戦争中に阿倍野から京都へ転居したし、初代鴈治郎のミナミ・玉屋町の家も中華料理屋に変わってしまったので、この家は「大阪の江戸」を現代に伝える貴重な文化財となった。

私も一度中へ入れてもらったことがある。役者の紋がデザインにあしらわれて、独特の風情が漂っていた。

（評論家　河内厚郎）